

性重複癌が疑われたが、組織学的に乳腺腫瘍は scirrhous ca を伴う lobular adenocarcinoma であり、子宮頸部も乳腺組織と同じ組織が検出された。以上より原発性乳癌の子宮頸部および肝転移と診断された。

原発巣および子宮頸部転移巣に対して放射線治療と化学療法を併用して、良好な腫瘍縮小効果が得られた。現在肝転移に対し化学療法を継続中である。

## 12. スルピリド服用による悪性症候群の1例

(消化器内科)

○植田 美加・長原 光・竹村 尚志・  
加藤 純子・川瀬千津子・大原 昇・  
小幡 裕

症例は64歳男性。慢性膵炎、糖尿病の診断のもと、腹痛の原因および悪性腫瘍の検索を目的に入院した。逆行性膵管造影施行3日後、突然39~40℃の発熱と意識障害と軽度の筋硬直が出現した。抗生剤、解熱剤にても解熱はみられず、その2日後、血圧の低下、 $\text{PaO}_2$ ・ $\text{PaCO}_2$ 低下、尿量の減少をきたし、ショック状態、急性腎不全となった。この間、アミラーゼ、リパーゼの上昇はなく、腹部エコー上著変なし。血液、尿、咽頭、痰、便培養は全て陰性で、腰椎穿刺にて髄液細胞数4/3、頭部CT上脳浮腫も認められなかった。生化学データ上CPK 2,144mU/mlと高値を示し、WBC 34,780/mm<sup>3</sup>、CRP 34.4、BUN 96.9mg/dl、Cr 4.1mg/dl、血中ミオグロビン500 $\mu\text{g}/\text{ml}$ であった。敗血症、髄膜炎等否定的で、発熱6日前よりスルピリド(®ドクマチール)服用していたこと、精神神経症状、CPK、ミオグロビン異常高値等より、スルピリドによる悪性症候群と診断し、服用を中止した上、ダントロレンナトリウム・プロモクリプチン投与を開始した。発症6日後、FDP 200 $\mu\text{g}/\text{ml}$ 、血小板5万/mm<sup>3</sup>でDICをきたし、発症8日目には喀痰による気道閉塞で呼吸困難におちいり、気管挿管、レスピレーターによる呼吸管理を施行した。脈拍は180まで上昇し心房細動も併発した。しかし発症12日目にはARF、DIC等改善し始め、約3週間後には意識も含めての症状の改善がみられた。

スルピリド単独による悪性症候群は報告が少なく、しかもこの症例のように重篤な症状を呈した例は極めて稀と考えられたので、報告した。

## 13. 当科における救急外来患者の臨床統計的観察

(歯科・口腔外科)

○千葉 昌子・片海 裕明・名取 正喜・  
野口 佳芳・長谷川直美・安藤 智博・

桑澤 隆補・三宮 慶邦・扇内 秀樹

今日の医療のなかでも、救急医療は地域住民にとって最も重要視されていることのひとつである。1978年本学に救急医療センターが開設され、当科も歯科口腔外科領域における救急患者の診察に携わっている。

今回私達は、当科における救急患者の実態を把握するために過去6年間における臨床統計的観察を行ったのでその概要を報告する。

対象は、1983年1月1日より1989年12月31日までの6年間に東京女子医大救急医療センターにおいて歯科口腔外科を受診した総計4,835名である。

[結果]

年度別では、1983年644名、1984年672名、1985年778名、1986年875名、1987年929名、1988年937名、1989年989名と年々増加の傾向を示した。

性別では、男性3,219名、女性2,605名で男女比は1:0.81であった。

年齢別では20歳台が最も多く30.4%を占め、次いで10歳未満の18.8%、30歳台の14.6%の順であった。

疾患別では歯の支持組織疾患が最も多く全体の44.6%を占め、次いで外傷が28.0%であった。また救急車での来院は385名であり、外傷、急性炎症が多く、入院に至ったものは212名であった。

救急患者の住居地域は、都内が87.1%で新宿区はそのうち53.8%を占めていた。

## 14. 真皮欠損用コラーゲン型被覆材

(形成外科) ○下田 勝巳・東山 卓嗣・  
野崎 幹弘・平山 峻

Yannas, Burkeらはグリコサミノグリカンを添加したコラーゲンを材料として、新しい人工皮膚(Stage I膜)を開発したが、コラーゲンの生体内での分解を抑えるために過度の架橋を施しており、これによりコラーゲンの持つ高い生体親和性を低下させている。

我々は、化学架橋を施さず、短時間熱脱水架橋のみ行なった繊維化アテロコラーゲン(以下FAC)と熱変性アテロコラーゲン(以下HAC)の複合物が家兎皮下で早期に繊維芽細胞と毛細血管を呼び込み、コラーゲンの形態も真皮様組織になることを見出した。本研究では、この材料を用いて三層構造の真皮欠損用創面被覆材(人工真皮)をデザインし、家兎全層皮膚欠損層に適用して、組織学的検討を加えた。

実験

家兎(BW 2.5~3.5kg)をエーテル麻酔下に、背部皮膚を切除した。牛アテロコラーゲン凍結乾燥真皮(再

繊維化コラーゲン・変性コラーゲンマトリックス4×4 cm)を生理食塩水で潤湿させて被覆した。術後1, 2, 3, 4, 5週の組織切片を採取し組織学的検索を行なった。

#### 結果と考察

術後第2週目においては、擬似真皮構造が認められ、人工真皮の組織親和性は高いと考えられる。

一方、表皮形成は第3週目より観察されたが表皮乳頭形成は見られなかった。第5週目には表皮は部分的に過形成の状態になっており、一見表皮乳頭様を呈していた。しかし正常表皮乳頭と比べると形態が異なっていた。ここでは、人工真皮の組織適合と表皮形成を中心に文献的考察を加えて報告する。

### 15. 全上下顎同時移動術を行った高度下顎前突の1症例

(歯科・口腔外科)

○高橋 達夫・野村 真弓・水野 博之・  
名取 正喜・三宮 慶邦・扇内 秀樹

近年顎変形症に対し、咬合機能の改善や審美的改善のために外科的矯正術(骨切り術)が行われているが、中顔面の垂直的・水平的な変化が著しくかつ高度な下顎前突症に対しては、全上下顎同時移動術が適応となる。

今回われわれは上顎劣成長を伴った高度下顎前突症の1例を経験したのでその概要を報告する。

症例は19歳の男性で、顎の変形が気になり咬合と改善の審美的改善を主訴として当科を受診した。上顎骨劣成長、下顎骨過成長でsketal class IIIと診断し、昭和62年8月より術前矯正治療を開始し、3年3カ月後の平成元年11月終了、同年12月12日上下顎骨骨切り術を施行した。手術は口内法により上顎はLe Fort I型骨切り術を、下顎は下顎枝矢状分割法を用いた。すなわち最初に上顎骨の骨切りを行い、下顎歯列を基準とし手術前に作製しておいた中間スプリントを用いて骨片を移動・固定し、次いで下顎の骨切りを行い最終スプリントを用いて固定を行うdouble splint法を応用した。6週間の顎間固定を行い、開口訓練の後、平成2年1月28日最大開口域24mmで軽快退院した。

### 16. エキスパンダー法における皮膚粘弾性計と超音波皮膚診断装置の応用

(形成外科)

○磯野 伸雄・片平 次郎・倉沢 卓見・  
樋口 良平・若松 信吾・野崎 幹弘・  
平山 峻

エキスパンダー法は、皮膚病辺の近くにシリコン製の袋を挿入し、その後徐々に生食水を注入し、健常皮膚を十分に拡張させ、病変部を切除する方法で、わが国でもかなり一般的な手術法となっている。われわれの教室においても、1985年から1989年12月末までに、190例の本法手術を施行している。しかるに、本法を確実にを行うために、いまだ問題が少なくなく、種々のモニター法が考案されている。今回我々は、皮膚の粘弾性および皮膚の厚さに着目し、若干の動物実験を行ったので報告する。

実験方法：高研社製の90mlラウンドタイプのエキスパンダーをラットの背部に挿入し、2週間後にフルエキスパンションした。そのさい、Cortex Technology社製のDERMAFLEX Aを用いてエキスパンダー直上の皮膚の粘弾性的変化すなわち注入前、注入直後、注入後30分、2日後、4日後のelasticity, distensibilityおよびhysteresisの変動を計測した。またエキスパンダー拡張前後および2カ月後の皮膚の厚さを皮膚用超音波診断装置同じくCortex Technology社製DERMASCAN Cを用いて計測した。

結果：粘弾性ではdistensibilityおよびhysteresisにおいて、フルエキスパンション直後に著明に減少が認められ、2日以降には、ほぼ注入前の値に回復した。またエキスパンダー直上の皮膚の厚さは拡張直後は変動はなかったが、2カ月後には著明な減少が認められた。

考案・結論：現段階では、臨床においてエキスパンダーに対する安全かつ簡便に使用可能なモニターはない。皮膚の全方向への伸展性を簡単に計測できる皮膚粘弾性計と、超音波により無侵襲で皮膚の厚さの変動を見ることがのできる皮膚超音波診断装置は、今回の動物実験において皮膚の変化のモニターとして有用であった。臨床への応用も可能と考えられた。

### 17. 未成熟人格を背景に多彩な症状を呈した女性の1例

(神経精神科) ○大和 央・難波 隆之

生活の破綻をきっかけに、不安発作が出現、更にアルコール依存、薬物乱用、摂食障害、繰り返す自傷行為、等の症状が、交互に出現した20歳女性の症例を報告する。

本症例は、中学生の時から非行にはしり、シンナーを吸引、姉の働くスナックでアルバイトをし、毎日ボトル1本程度のウイスキーを飲み、義務教育は途中で放棄、17歳の時に結婚・出産し、妻としてまた母親と